

## 技巧と質感：由美子 イレイ-ギョクチェのコラグラフ版画

エドワード M. ゴメズ

表出された形態に対して内在する中身。意味するものと手段。美術家は時として、ある種の感情や概念を伝えるために、自分自身を旅たさせては表現を試みようとする。例えば抽象絵画などは見かけ以上にたいへんで、しばしばそれ自体の野心に煩わされて自ら失敗してしまう。作家の中には、技巧を凝らしすぎて度を越す傾向があり、その結果、技術的には優れて良くまとまっているものの、作品としては変化が無く何も訴えてこないものに仕上がってしまう。

より興味深く、より伝達しうる、まさに熟成した作家とは、表現能力とメッセージの両方を、打ち出せる人である。その場合作品の構成要素は、ほどよい具合にバランスあるいは調和が取れ、一つの要素が他方を圧倒するようなことは無い。実験的な目的である種の効果を狙って、作家が意図して何かを強調しようと、試す気持ちになるのは解るが、それはおうおうにして、危険な事でもある。なぜならどの作家もが、作品にあまり手を加え過ぎずに、やり遂げれるとはかぎらないからだ。

由美子イレイ-ギョクチェの彼女独特なスタイルは非常に明確であり、人目をひく技巧をそなえている。彼女の何枚にも重ねて出来た質感の豊かなコラグラフ作品は、これ見よがしの自意識でもって、その特異性を叫ばんばかりだ。しかし観る者にとって幸いな事には、イレイ-ギョクチェの作品は、決してその自負心を押しつけてしまわないことで、それは彼女が素材の何をどのように扱うべきかを十分に心得ているからである。緻密な手作業に加えて、紙、インク、色彩、等、しばしば素材そのものの良さに語らせる事が出来る。

このことは、ここ数年にわたってイレイ-ギョクチェの作品の重要な特徴となっている。それだから、形にはまって固定する事も無く、独自の作品製作を展開させ、より発展させることが出来たと言える。有能な技術者と言う役柄をも担った美術家は、製作において、これで充分だと、何時手を止めるべきかの時点を心得ている。イレイ-ギョクチェの場合、緻密に刷られたいくつもの版画を重ね合わせて糊付けし、サンドイッチに挟みこまれた手造りの和紙を切り込んでいく過程がある時点で止まって、切り込まれた合間から、壮麗な表出が独立した存在として現れてくる瞬間がある。それは芸術的表現と技巧技術が絶え間なく凌ぎを削る中で、まったく予期出来ないエキサイティングな瞬間でもある。

東京—大坂—シカゴで開催された連続展には、すでに検討を重ね重ねて続けている、マルチレイヤー版画の表現法をより発展させたものに加え、彼女独特のコラグラフ手法を新たなフォーマットに展開させて造った、例えば吊り軸のようなものや、金網と和紙の組み立てたもの等が展示され、大型サイズの作品を蝶つがいのでつないで立てかけたパネルなどは、一見して即座に“日本的なもの”が表示される。このパネル装置は伝統的な屏風をはっきりと忍ばせると同時に、作品展示の目的にふさわしい額装容器の役割をし、そしてまた、これら版画の製作過程へ、注意の目を引かせるのに役立つ。結局のところ、新しいものにしろ古いものにしろ、大体の日本芸術と言うのは、其の工程や制作気構えそのもの、技術においてある種の熟練度が要求される。それらは必ずしも押し付けがましい派手さとしてでなく、むしろ地味で当然な事としてである。

質感を備えたカードボードによる版の下ごしらえ、それぞれ厚みの異なる繊細な紙に色刷りする作業、和紙に刷られた版画を糊で貼り合わせ、外科医的な正確さで刃で描く“ドローイング”、イレイ ギョクチェのコラグラフ作品は、そうした数々の工程がとられるにもかかわらず、他の作品の様に素早く仕上げで大胆な発言をしては、壁面内にひっそり引っ込んでしまう様なものにはならない。

むしろ一種の共鳴振を達成させた抽象芸術のように、技術的に優れてなお且つ、内在された中身、、、に呼吸の出来る充分な空間を与えている。それらの意味するものや表現されているものを、ごく簡単に何気も無く、観る者たちに打ち明かす。そこには流れる時間の気配があり何かが少しずつ緩まってとき解ける感じがある。彼女の大振りに描いた葉状の形、生物：それらが何を表していようと、そこには確かに生植物から受けた感動、鼓舞が示唆されている。ある部分で、自分のアートに専念を誓う彼女自身が発するエネルギー：進歩、向上と、より深く探求しようとする作家からの反響、反映とも言え、進行して動き出すことへの心のときめきがそこにある。

